

## ■ ドル/円は一旦スピード調整も、この調整は浅く短い！？

今から20年近く前、筆者は証券マン時代の支店の先輩でもあり、長らく師と仰いでいる方から「ドル/円の8年高値サイクル」の存在を知らされた。実際、2007年6月に124.13円の高値をつけて下落に転じ、一時的にも75円台まで一旦大きく円高方向に振れたドル/円が、次に目立った高値=125.86円をつけたのは2015年6月のことであった。

このパターンに基づいて考えると、次に目立った高値をつけに行くのは来年(2023年)あたりということになる。その場合の目標水準を、以前から師は「125.86円よりも円安方向」と述べていたが、最近のレポートでは「理想的なシナリオは2023年6月頃に150-160円」としている。かねて筆者は、個人的に130-135円程度と考えてきたが、コロナ禍やプーチン戦争などが想定以上に円安を加速させる可能性は大いにあろう。

そんな慧眼の師による分析では、ドル/円は3月28日に付けた125.05円をもって一旦スピード調整の局面を迎える可能性があるという。もちろん、3月初旬以降の強烈かつ急速な上げつづりを考えれば、さもありませんと言ったところ。

ドル/円が目先的にも調整入りするならば、そこは絶好の押し目買いのチャンスということになると思われるが、この調整は比較的浅く短期的なものに留まる可能性も十分にあると見られる。実際、3月28日以降の調整は3月初旬の水準から125.05円までの上げに対する38.2%押しの水準(=121.20-30円処)までに留まっている。

まして、ここにきて米連邦準備理事会(FRB)の政策方針が、想定してきた以上に引き締め方向へと強く傾いていることを市場は思い知らされている。既知のとおり、今週5日にはブレイナード理事が「バランスシートを5月にも急速なペースで縮小」と述べたうえ、翌6日に公表された3月開催分の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録でも、今後1回以上の0.5%の大幅利上げに加えて月950億ドルのバランスシート縮小がメンバーに支持されていると明らかにされた。

こうして、連日のようにタカ派色の強いネタが市場に放り込まれていることを一因に、ドル/円は足元で再び123円台後半の水準にまで値を戻してきている。むしろ、その背景には対ユーロでドルが強含みのまま推移していることもある。

欧州連合(EU)は5日、ロシア産石炭を禁輸する制裁案を発表し、石油やガスの禁輸にはなおも慎重であることが再確認された。結果、ひとまず足元のユーロ売りは鎮まっているが、今後も追加の制裁措置に踏み切る可能性は大いにある。現在想定することが可能なユーロ圏の経済的ダメージを、まだユーロは織り込み切っていないと見られる。

前回更新分では、ひとまずユーロ/ドルが一定の戻りを試す可能性について述べたが、結果的には的外れものとなった。やはり、ロシア軍による民間人虐殺の疑いが浮上してきたことは軽視できるはずもなく、今後も更なる追加制裁の可能性には要警戒とあらためて心得る。

当面のユーロ/ドルについては、EUの追加制裁がとりあえず石炭禁輸に留まることを前提に、1.0900ドルを軸とした1.0850-1.0950ドルのレンジ内で推移するものと想定しておきたい。

一方、ドル/円については目先的に123.60円を軸とした123.00-124.20円のレンジ内で推移すると想定し、仮に123円処をクリアに下抜けてきた場合は、ひとまず122.30-40円処まで調整する可能性があると思っておきたい。

(04月07日 09:45)